7

上の写真は、火を付けて燃え上がるブッシュネルさんです。先述のとおり、この焼身自殺のようすは、次のURLに載せられた動画で視聴できます。その左側の映像は、そこに駆けつけた警察と消防隊員です。

https://www.rt.com/news/593158-man-self-immolates-embassy/（約2分30秒）

ところが驚いたことに、警官は焼身自殺した若い兵士を救おうともせず、燃え上がっているブッシュネルさんに銃口を向けるのみでした。

丸腰でしかも燃え上がっているブッシュネルさんが、抵抗や反撃をできるはずもないこととを、この警官は分からなかったのでしょうか。いったい彼は何を怖れていたのでしょうか。

もし彼が怖れていたとすれば、それは「虐げられているパレスチナの人々と連帯しようとするブッシュネルさんの勇気と意志の強さ」だったのかも知れません。

この動画はX（旧Twitter）などを通じてアメリカ全土を駆けめぐったでしょうから、それが心ある学生の胸を打ち、その結果、

コロンビア大学などの名門校から抗議運動の火が燃え上がり、それが燎原の火のごとく全米に広がっていったのではないか。

私はこのように想像しています。

そして、その裏に大富豪イーロン・マスクが、権力による検閲・削除の道具となっていたX（旧Twitter）を買い取り、それを自由な言論空間に解放したことも、おおきく貢献したのではないかと推測しています。

そこが、同じ大富豪でもビル・ゲイツと全く違うところです。

8

さて私がこのブッシュネルさんの記事を読み、動画を視聴して真っ先に頭に浮かんだのは、ベトナム戦争時に南ベトナムの高僧が焼身自殺をした映像でした。アメリカが支持するサイゴンのゴ・ディン・ジェム政権による仏教徒弾圧に抗議したものという報道でした。

この自殺の名目は「仏教徒弾圧にたいする抗議」でしたが、世界中の心ある人々には、この焼身自殺が「理不尽なサイゴン政権を支持してベトナム戦争を長引かせている、アメリカ政府にたいする抗議」として目に映りました。

これはまさに現在、無慈悲で残酷なゼレンスキー大統領やネタニヤ

フ首相を裏で支持して、ウクライナ紛争やガザ地区の民族浄化作戦を長引かせているバイデン大統領の姿を彷彿とさせるものです。

上の写真は、この高僧ディック・クアン・ドッグ師が焼身自殺している映像です。このような映像が世界中を駆けめぐり、ベトナム戦争反対と反米の世論をかき立てたことは間違いないでしょう。私もこの映像で大きく心を揺り動かされた一人だったからです。

なお、この高僧が弟子に石油を頭から浴びせかけさせて燃え上がる動画は、次のURLで見ることができます。私がその直後にこの動画を見ていたら、もっとベトナム反戦運動に心身を傾注していたかも知れません。

https://karmanima.net/archives/12102

このように大きな権力と闘うときには、武力や暴力で闘うよりも「非暴力直接行動」で闘う方が効果的であることが少なくないのです。

9

このような「非暴力直接行動」に力があることをキング牧師も唱えていたのですが、それを最も鮮やか

に私に教えてくれたのが、黒人解放運動で用いられた「シット・イン（座り込み）」という戦術でした。

一九六〇年代当時は、バスに乗るのもトイレも食堂も、どこでも白人と黒人は同席を許されませんでした。キング牧師はこのような黒人差別を打ち破るために、武器や暴力で白人と直接的に闘うのではなく、白人が決めた理不尽な決まりを破り、むしろ逮捕されて牢獄に入る道を選びました。

こうして、白人が一方的に決めた理不尽な決まりを破ると、必ず白人から暴力をふるわれます。しかし、白人による暴力が新聞に載ったり、それが記録映画になってアメリカ全土に広がるようになると、確実に世論は変わり始めます。

そのひとつが、白人専用のランチカウンターで、白人客がいる目の前で、堂々と食事を注文する運動でした。

当然、白人から「ここはおまえたちの来る場所ではない」としてさまざまな嫌がらせや暴力がふるわれることになります。

次頁の写真では白人が、ランチカウンターに座り込んだ黒人に、頭からソースやケチャップを浴びせています。時には直接からだに手を触れて引きずり降ろそうとしたり、卵をなげつけたりしました。警察を呼んできて逮捕させることもありました。

この「シット・イン」運動を最初に始めたのは、ノースカロライナ州グリーンズボロにある州立農工大学の4人の黒人学生でした。彼らは一九六〇年二月に、Woolworth（ウールワス、チェーン展開している百貨店）の白人専用ランチカウンターの席に座ることから始まったのです。

もちろん白人客は彼らに罵声を浴びせ、ケチャップを頭からかけたり、卵を投げつけたり、唾をはきか

グリーンズボロの座り込み学生　https://docent.exblog.jp/22770102

けたりなど、さまざまないやがらせをしました。それでも彼らは毎日やってきて、座り続けました。

客足の遠のいたWoolworthの売り上げは大打撃をうけました。そして、とうとう態度を軟化し、一九六〇年七月、ランチカウンターの人種差別撤廃を、全チェーンで宣言したのです。「非暴力直接行動」の勝利でした。

この成果をふまえて「シット・イン」運動は全米に広がり、公民権運動を確実に前進させることになりました。公民権運動と言えば、ローザ・パークス女史がバスの白人席に座ったことをきっかけにして始まった「バス・ボイコット」運動が有名で、この「シット・イン」はあまり知られていません。

10

と偉そうなことを言っている私ですが、私自身もノースカロライナ州グリーンズボロにある州立農工大学に「日本語の非常勤講師」として赴任するまで

は、まったく「シット・イン」運動を知らなかったのです。

グリーンズボロに赴任してから、たまたま市内を見学がてら散歩しているうちに、市の博物館になっている百貨店ウールワスにぶつかって、なかの資料を見たり読んだりしているうちに、ここが「シット・イン」運動の発祥の地だったことを知り、驚愕したのでした。

ノースカロライナ州グリーンズボロの小さな博物館。ここの州立大学の学生が全米で初めてレストランへの座り込み運動（Sit-in）を始めた。後ろの写真はその４人の学生たち

私が州立農工大学の「日本語非常勤講師」になったのは、そこで日本語を教えていた女性の日本人講師が、学生の99％が黒人であることに嫌気がさしたのか、もう期末が近くなり期末試験をして単位を出さなくてはいけないのに突然、姿をくらましてしまい、私がピンチヒッターを頼まれたからでした。

しかし、そんなきっかけでもなければ、私がノースカロライナ州グリーンズボロという片田舎の大学、しかも州立農工大学という黒人大学に赴任することなどあり得なかったのですから、その「とんずら」した教師に感謝しなければなりません。まさに「災い転じて福」「塞翁が馬」です。

ちなみに上の写真は、州立グリーズボロ農工大学で教えていた若かりし頃の私です。そばにいる小さな黒人の

男の子は私が宿舎として与えられていた建物の管理人の子どもです。

11

私が何故このように長々と公民権運動「非暴力直接行動」のことを紹介してきたかというと、ガザ地区におけるパレスチナ人の解放も、すでに述べてきたような「非暴力直接行動」によってしか勝利の展望は開けてこないのではないか、ということを言いたかったからです。

「ハマス」というイスラム原理主義集団による武力闘争では、ガザ地区という「青天井の牢獄」から解放されることはありません。なぜならイスラエル軍との戦争は、武力の差がありすぎますから、武力でイスラエル軍を攻撃すればするほど、それへの「報復」という口実で、ガザ地区が攻撃され、ますます死者数が増えるばかりだからです。

しかも、その「報復」という名の反撃で、ネタニヤフ首相が公言している「ハマス殲滅（せんめつ）」という作戦は成功しているかというと、その成果はほとんどゼロに近いのです。報道を読む限り、殺されているのは「女と子ども」ばかりで、ハマスの死者数を読んだことがほとんどありません。

それもそのはずです。早々にハマスを殲滅してしまえば、それ以上「ガザ地区」を攻撃する口実がなくなります。これではガザ地区からパレスチナ人を一掃して、更地（さらち）になったガザ地区を土台にして、「大イスラエル」を建設する第一歩にすることはできません。

なぜなら、そこにはまだパレスチナ人が残っていますから、ガザ沖に眠っている石油・天然ガスも手に入れることはできなくなるからです。

ですから、ハマスに大暴れしてもらって、それへの反撃を口実に住民を「皆殺し」にするか、皆殺しを怖れた住民がカザを「明けわたし」て全員がエジプトに移住してもらうのが最上の策なのです。（あるいはガザ地区住民を「兵糧攻め」にして全員を餓死させるのも、もうひとつの方法かも知れません。）

ガザの最南部ラファ（Rafah）に集結させられた住民に、エジプトからの救援物資が届けられる只一つの通路（Kerem Shalom）を、イスラエルが閉じてしまったことがそれをよく示しています。（上図を参照、丸印が通路）

＊Israel shuts down Gaza border crossing after Hamas attack（イスラエル、ハマスの攻撃を受けてガザ国境を閉鎖）
https://www.rt.com/news/597040-israel-closes-gaza-crossing/ 6 May, 2024

右の記事はそれを報じたものですが、またもやイスラエルは、これは「ハマスによるロケット攻撃」にたいする反撃だと言うのですから、「もうそろそろ相互協力もいいかげんにしろ」と言いたくなります。

ネタニヤフ首相の言う「ハマス殲滅」はどこに行ったのでしょうか。やはりイスラエルのもう一つの戦略は「兵糧攻め」による「全員餓死」なのかも知れません。

12

このような意見・見通しをもっているのは私だけかも知れないと思っていたら、高名な経済学者マイケル・ハドソンも、下記の論考で同じような見解をもっていることを知り、喜んでよいのか悲しんでよいのか複雑な気持ちになりました。

＊ The Truth About the Destruction of Gaza（ガザ破壊の真実）
https://www.unz.com/mhudson/the-truth-about-the-destruction-of-gaza/　April 14, 2024、Michael Hudson

なぜならマイケル・ハドソンの見通しはガザ住民にとって必ずしも明るくないからです。

ですから、ガザ住民のイスラエルにたいする戦いは、ハマスの武力に頼るのではなく、「非暴力直接行動」の方が良かったのではないでしょうか。

ラファに集められた住民が「主権者」として生き残る道があるとすれば、エジプトに脱出するのではなく、あくまでガザの地を死守することではないかと思います。そうすれば、ネタニヤフ首相とイスラエル軍は世界中の眼が見つめるなかで、白昼堂々とカザ住民のすべてを殺し尽くすという悪行（あくぎょう）を演じざるを得なくなります。

しかし、それを見つめる世界中の心あるひとたちは、それを座視（ざし）することができず、必ずや大きな声をあげるに違いありません。

「シット・イン」運動のなかで、白人による見るに堪えない暴行（ぼうこう）を、黒人が「非暴力直接行動」で耐えている姿は、白人すら座視することができず、ついに黒人差別のランチカウンターが崩壊した歴史から、

私たちは大きく学ばなければならないのではないでしょうか。

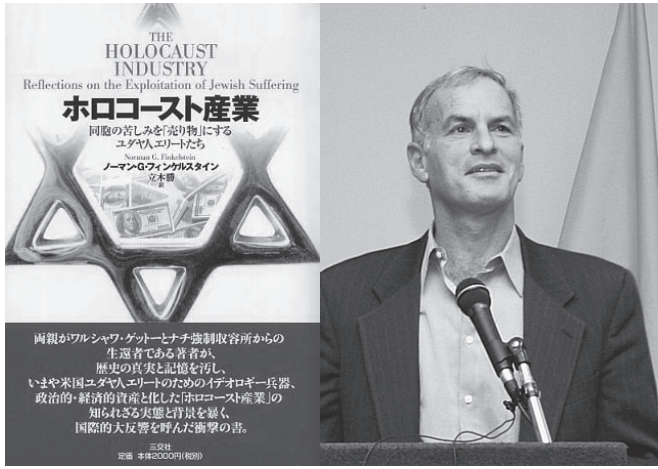
13

このような「非暴力直接行動」が成功した例を、私たちは南アフリカ共和国の「アパルトヘイト撤廃」からも見ることができます。

この「アパルトヘイト撤廃」についてはネルソン・マンデラの活躍が大きく評価されています。しかしかつて南ア共産党員であったマンデラ氏は武装闘争路線をとりましたが、後年はそれを反省し、アフリカ民族会議（ANC）の議長として非暴力直接行動の戦術で戦いを展開しました。

この「非暴力直接行動」の先頭に立っていたのは、スティーヴ・ビコという若い指導者でした。彼は「ブラック・イズ・ビューティフル」というスローガンで黒人の意識革命を主導し、彼の活動は映画「遠い夜明け」にも生き生きと描かれています。

私がアパルトヘイトを知るようになってからのアフリ



ノーマン・フィンケルスタインと著書『ホロコースト産業』

カ民族会議の活動は、世界中に南アの実態を知らせるための演劇・映画や音楽活動に大きなエネルギーを注いでいたように思います。

これもひとつの「非暴力直接行動」であり、こうして世界はアパルトヘイトの実態を知るようになり、ついにアパルトヘイトという制度はなくなりました、

その経験が、今や南ア政府によってイスラエル軍とネタニヤフ首相をＩＣＪ（国際司法裁判所）に提訴する活動につながっているように思います。ですから、パレスチナの解放運動も「非暴力直接行動」という戦術に、転換する必要があるのではないでしょうか。

14

名著『ホロコースト産業』を著して有名になったノーマン・フィンケルスタインは、「ナチスの被害者」を売り物にして儲けているユダヤ人を厳しく批判しました。

彼の両親も強制収容所の生き残りであり、彼自身がユダヤ人でしたから、この批判は世界に大きな反響を呼び

起こしました。

しかし、このフィンケルスタインが、ガンジーの著作を読み尽くし、パレスチナ人の戦いも「非暴力直接行動」であるべきだと主張したことは、ほとんど知られていません。（書名は『ガンジーが言ったこと：非暴力、抵抗、そして勇気』、ただし、まだ翻訳は出版されていません）

そもそも、当時のパレスチナ解放機構（ＰＬＯ）執行委員会議長であったアッバスと闘わせるため、「ハマス」というイスラム原理主義集団を育てあげたのも、イスラエルであったことを私たちは、深刻に受け止めるべきでしょう。

それにしても、あるインタビュー番組でフィンケルスタインが、「非暴力直接行動で闘うべきだと言っても私の言うことに耳を貸すガザ人／パレスチナ人が多くならない」と言って溜め息をついていた彼の姿が、今でも私の眼に焼き付いています。

〈本章のキーワード〉

アーロン・ブッシュネル（Aaron Bushnell、アメリカ空軍兵士、イスラエルの蛮行に抗議して焼身自殺）
ディック・クアン・ドッグ師（ベトナム戦争中にサイゴン政府に抗議して焼身自殺）
スティーヴ・ビコ（Steve Biko、南ア「アパルトヘイト」反対の若き指導者、逮捕獄死）
ノーマン・フィンケルスタイン（Norman Finkelstein、ユダヤ人、著書『ホロコースト産業』『イスラエル擁護論批判』）

「非暴力直接行動」
「シット・イン」運動（Sit In、黒人差別ランチカウンターへの座り込み運動）
ラベンダー（lavender、イスラエルが開発したAI暗殺マシーン）
ANC（African National Congress、アフリカ民族会議、議長ネルソン・マンデラ）
BDS運動（Boycott, Divestment and Sanctions、不買運動、投資撤収、経済制裁）
UNRWA（United Nations Relief and Works Agency for Palestine Refugees in the Near East、国連パレスチナ難民救済事業機関）